

氏名	金 銀姫		
学位	博士（日本語文化学）		
学位記番号	博甲第95号		
学位授与年月日	2012年3月22日		
審査研究科	外国語学研究科		
論文題目	『方言類釋』を主とする対訳語彙集の日中朝比較研究		
論文審査委員	(主査) 大東文化大学教授	寺村 政男	(博士・文学)
	(副査) 大東文化大学教授	藏中しのぶ	(博士・文学)
	(副査) 大東文化大学教授	岡崎 敏雄	(Ph. D・言語学)
	(副査) 早稲田大学文学学術院教授	古屋 昭弘	(博士・文学)

## 金 銀姫 博士論文 審査報告

### 金銀姫氏略歴

金氏は2000年9月中国吉林大学経済貿易日語系入学し、2004年7月同大学業来日後2004年9月大正大学別科日本語入学。2006年3月同別科終了して、2006年4月大東文化大学大学院外国語学研究科日本語学専攻修士課程入学、2008年3月同課程修了、2008年4月大東文化大学大学院外国語学研究科日本語文化学専攻博士課程後期課程入学。

現在、同課程4年生である。

本博士論文である、『方言類釋』を主とする対訳語彙集の日中朝比較研究、に関わる研究論文として以下の論考及び口頭発表があり、これらの研究業績を基礎として、本論文を執筆し提出するにいたった。

### これまでの執筆論文一覧

論文

- 1・『譯語類解』の言葉についての考察—『譯語類解』の中の同義語の比較について  
「指向」6号 平成21年（2009年）3月15日発行
- 2・『華語類抄』における韓国語の子音、母音、バッチムの変化  
「外国語学会誌」38号 平成21年（2009年）3月15日発行
- 3・『朝鮮館訳語』と『華語類抄』における対照研究  
「外国語学会誌」39号 平成22年（2010年）3月15日発行
- 4・『方言類釋』における倭語の表記に関する研究  
「指向」7号 平成22年（2010年）3月15日発行

- 5・『方言類釋』の日本語語釈の部分に関する研究  
「外国語学研究」11号 平成22年（2010年）3月30日発行
- 6・『方言類釋』と『倭語類解』についての研究 ——共有する見出し語について  
「語学教育研究論叢」第27号 平成22年（2010年）2月28日発行
- 7・『方言類釋』の日本語語釈の部分についての研究**  
「水門一言葉と歴史」22号 平成22年（2010年）4月18日発行
- 8・『譯語類解』、『倭語類解』、『方言類釋』の比較  
「外国語学研究」12号 平成23年（2011年）3月30日発行
- 9・『譯語類解』と『方言類釋』の比較——朝鮮語の注記に関して  
「語学教育研究論叢」第28号 平成23年（2011年）2月28日発行

#### 口頭発表

- 1・『方言類釋』の日本語語釈の部分に関する研究  
第一回「東西文化の融合」国際シンポジウム  
大東文化会館ホール 2009年12月19日
- 2・『方言類釋』における倭語に関する研究  
水門の会東京例会（語学部門）  
早稲田大学文学学術院（戸山キャンパス）2010年3月20日
- 3・『譯語類解』と『方言類釋』—朝鮮語の注記を中心に  
第二回「東西文化の融合」国際シンポジウム  
大東文化会館ホール 2010年10月31日
- 4・『譯語類解』と『方言類釋』の類義語に関する研究—『朴通事新釋諺解』と比較して  
水門の会東京支部例会  
大東文化会館ホール 2011年10月2日
- 5・倭語注釈から見る『方言類釋』  
第三回「東西文化の融合」国際シンポジウム  
大東文化会館ホール 2011年11月6日

#### 本博士論文の構成

本論文は以下の三章十二節で構成されている。

目次

序章

#### 第一章. 先行研究

第一節. 朝鮮の対外関係及び対訳語彙集の刊行状況

第二節. 研究成果及びそれによる課題

第三節. 本論文の研究課題及び研究方法

## 第二章. 対訳語彙集の見出し語に関する比較

第一節『朝鮮館訳語』と『華語類抄』における対訳研究

第二節『方言類釋』と『倭語類解』についての研究—共有する見出し語について

第三節『訳語類解』と『方言類釋』の比較—見出し語について

第四節『訳語類解』の言葉についての研究—同義語の比較について

第五節『譯語類解』と『方言類釋』の類義語に関する研究—『朴通事新釋 諺解』と比較して

第六節『譯語類解』、『倭語類解』、『方言類釋』の比較

## 第三章. 対訳注記に関する研究

第一節『方言類釋』における倭語の表記に関する研究

第二節『方言類釋』の日本語語釈の部分についての研究 1

第三節『方言類釋』の日本語語釈の部分についての研究 2

## まとめ

参考資料

附表

## 本博士論文の講評

本論文は以下の2点を研究の立脚点としている。

1：研究対象：『方言類釋』（漢語、朝鮮語、蒙古語、満洲語、倭語の対訳語彙集）を縦軸として、『倭語類解』、『譯語類解』などの所謂「類解類」や『華語類抄』、『朝鮮館譯語』、『老乞大』などの対訳語彙集を横軸として倭語、漢語、朝鮮語面からの考証を進めたものである。又『方言類釋』の所謂「方言」とは、一般に認識されている Dialect ではなく、各国の口頭語と言う認識に立つ。

2：研究内容：まず各類解類の見出し語に注目し、特に漢語と倭語に研究の力点を置き、詳細な分析を施したことである。これは『方言類釋』は五言語の対訳語彙集とはいえ、これは当時の朝鮮半島国家が事大主義政策を取っていたことの反映であり、自国の言語である朝鮮語以外は、当時の政治環境や、貿易面（対馬藩介在の日朝貿易）からみて金氏も指摘するように漢語、倭語が中心であり蒙古語はすでに影響力はなく、清語（満洲語）は『方言類釋』が編纂された 1778 年（乾隆 47 年）と言う年代を考えれば、実用的なものとは考えられず、事大主義の名残ともいえるべきものであるとの判断に基づいている。

上記2点は、特に『方言類釋』に関しては、本論文の第一章を見ても解るように初歩的な書誌研究はあるものの、内容に踏み込んだ先行研究は日本、韓国、中国ともに基礎的翻刻である『方言類釋倭語彙』（木村晟、山内潤三編、1989年・小林印刷出版部）、「ソウル大学校蔵『方言類釋』の倭語彙」（木村晟「駒沢国文」26号1989年・橋本芳一郎先生退任記念號）以外ほとんどなく、したがって金氏が本研究で得た成果は現時点では、そのほとんどが最先端の学術成果と言える。

序章では本論考の目的を明らかに示し、各章へ論考を進めている。以下第一章より各章ごとに見てゆく。

第一章. 先行研究は以下の三節より構成されている、

- 第一節、 朝鮮の対外関係及び対訳語彙集の刊行状況。
- 第二節、 研究成果及びそれによる課題。
- 第三節、 本論文の研究課題及び研究方法。

#### 本章の概略

第一節では1600年代より1800年代にかけて朝鮮半島で刊行された対訳語彙集の編纂された歴史的背景、いわゆる中朝関係、日朝関係に言及し、朝鮮王朝における司譯院の役割に触れ、及びその成果について簡明に述べている。

第二節では濱田 敦『朝鮮資料による日本語研究』や泉 文明「ソウル大学蔵『方言類釋』倭語彙の諸問題」などの先行研究の成果を詳しく紹介し、その問題点及び未解明の問題に言及し、本博士論文の研究方向を確定している。

第三節では研究すべき点として

1・『朴通事新釋諺解』と『方言類釋』はその当時の言葉を表現しようとしている対訳会話書と対訳語彙書であるが、両書の言葉の一致性がどれくらいなるか。

2・『方言類釋』中、倭語の注記をしていない見出し語の研究。倭語注記のない見出し語の意味を把握し、それらが『倭語類解』、『捷解新語』を参考して解釈を付ける可能性はなかっただろうか。また、『方言類釋』の注記を付ける方法としてはこの問題が解決できなかっただろうか。倭語注記が付けられてないのは偶然であるかどうか

それともほかの原因があっただろうか。

3・日本の朝鮮語学習である『交隣須知』は刊行時期は遅くなっているが、そのできた時期18世紀初は『方言類釋』が編纂される前なので、影響関係存在しているかは確認しなければならない。

以上の3点である。

ともに妥当適切な判断と十分な説明ができていけると言える。

第二章は以下の六節より構成されている。

第一節『朝鮮館訳語』と『華語類抄』における対訳研究

第二節『方言類釋』と『倭語類解』についての研究—共有する見出し語について

第三節『訳語類解』と『方言類釋』の比較—見出し語について

第四節『訳語類解』の言葉についての研究—同義語の比較について

第五節『譯語類解』と『方言類釋』の類義語に関する研究—『朴通事新釋諺解』と比較して

第六節『譯語類解』、『倭語類解』、『方言類釋』の比較

#### 本章の概略

第一節は漢語と朝鮮語を中心にして『華夷譯語』中の『朝鮮館譯語』と『華語類抄』を、1・両書の書かれた年代の差、2・両書の内容の差、3・単語の類、各種類の数、その比較、4・注釈の有る語彙とない語彙の4つに分類し、対照表を作成し詳細な考察がなされている。結論として『朝鮮館訳語』と『華語類抄』を全体的に比べてみると、『華語類抄』に方言と現在使われていない語彙が多い。『朝鮮館訳語』の中の語彙数は少ないが、現在標準語として使われる語彙が多数を占めている。と言う結論を導き出している。

第二節は『方言類釋』と『倭語類解』について、見出し語を中心に、日本語部分を詳細な比較表を作成し考察を加えている。それにより例えば、いずれも前『倭語類解』後『方言類釋』「日食」は「にっしょく」、「いっしょく」。「參星」は「しんせい」、「さんせい」（參はサン、シンの両様の読みがあるが、參星の場合は日本語ではシンセイと読むのが正しいが、方言か文化レベルの差と考えられる)。「養子」は「ようし」、「やしのうむっこ」。「祖父」は「じじ」「おうんじ」などの例をみると『倭語類解』は規範の日

本語に近く『方言類釋』には地方方言の色彩が強いことがわかる。金氏も指摘するように『倭語類解』には日本側からも雨森芳州などが参加している事、『方言類釋』にはその編纂に日本人の参加が見られない事による差異と考えられる。ただ残念なことに、『日葡字書』の用例との比較が欠けている。

第三節は『訳語類解』と『方言類釋』を素材にして、漢語と朝鮮語を中心に見出し語に対しての考察を加えている。先行研究として小倉進平氏が『朝鮮語学史』で少し触れているが、『方言類釋』の見出し語は『訳語類解』に大きく依拠していることを、より詳細な調査により報告している。

第四節は『訳語類解』にみられる語彙について、同義語を中心にした比較研究である。近世漢語に見られる「昨日」と「夜來」、「流星」と「賊星」、「月兒」と「太陰」など見出し語の漢語を取り上げて比較検討を施している。概ね妥当な結論を得ている。

第五節は『譯語類解』と『方言類釋』の類義語を取り上げて、『朴通事新釋諺解』と比較考察している。『朴通事新釋諺解』中の語彙は『譯語類解』と『方言類釋』の見出し語に見出せるものが多く、年代的にも三書には共通するものが多いことを実証している。また参考資料として『朴通事新釋諺解』の朝鮮語よりの日本語訳を添えている。

第六節は第二章のまとめの性格を持っている。『譯語類解』、『倭語類解』、『方言類釋』の比較を行っている。例えば名詞接尾辞の「～兒」「～子」の相違や見出し語に見られる白話傾斜の程度などを考証している。

以上第二章は各節とも有機的に継続しており、導き出された結論は極めて適切であると言える。

第三章. 対訳注記に関する研究 は以下の三節で構成されている。

第一節『方言類釋』における倭語の表記に関する研究

第二節『方言類釋』の日本語語積の部分についての研究 1

第三節『方言類釋』の日本語語積の部分についての研究 2

本章は本博士の根幹の部分に当たると言える。

本章の概略

第一節では『方言類釋』における倭語の表記に関する研究を取り扱っている。

本節では『方言類釋』のハングル表記された倭語、即ち日本語の表記法について論じている。例えば、見出し語→晚霞 ハングル表記→manganogasumi 金氏の解説→晩方のカスミ、朝鮮語と日本語と言う音韻体系の相違する言語で異種言語を表記する為に編者が様々な工夫をしながら表記している現象を丁寧な手法で明らかにしている。

第二節、第三節では『方言類釋』日本語の語注を取り扱っている。

例えば見出し語が「天陰」の場合は対応する日本語を表したハングルは소랑가, 그모리, 마사ㅅㅅ (Sorang-ga, kumori, masita) 「そらがくもりました」本来朝鮮語にはない濁音の表記을 받침 (パッチン)、「暖和」ハングル表記は논독가니 마사ㅅㅅ (nontok kani, masita) 「のどかに・ました」

金氏の推測では朝鮮文字의 받침 「ㄴ」(n)、「ㅇ」(ng) は日本語の濁音表記として記入した可能性がある。とするなど優れた見識が見られる。

まとめ

第一章から第三章までの研究成果の総括を行って、将来の展望に触れている。そこに盛られているように本博士論文は、今後もさまざまな可能性を秘めていることは言うまでもない。

上記述べてきたように、本博士論文は、先行研究の少ない『方言類釋』について異種言語文献を利用した日本語研究と言え、異民族が異種言語との接触で生じる様々な矛盾と解決のための工夫を総合的に解明した労作であると言える。

#### 口述試験における学外副査の本博士論文に対する意見 古屋昭弘教授

金銀姫氏の論文は朝鮮王朝の五ヶ国対訳語彙集①『方言類釋』（18世紀後半）を主な資料として近世の日本語、中国語、朝鮮語の比較研究を行なったものである。具体的には、中国語の見出し語に対する日本語訳の検討のみならず、関連する多くの対訳語彙集・辞書たとえば明初の②『朝鮮館訳語』や朝鮮王朝の③『訳語類解』、④『倭語類解』、⑤『華語類抄』をも駆使して、二種あるいは三種の資料間（②と⑤、①と④、①と③と④）の中国語の見出し語の比較、二種の資料間（①と④）の日本語訳（ハングル表記）の比較、朝鮮語訳二種の資料間（①と③）の朝鮮語訳の比較研究を着実にこなしたものである。『朴通事諺解新釈』のような朝鮮王朝の中国語会話教科書も参照されている。先行研究をよく消化したうえ、各資料の時代背景や成立過程、それらに反映した各言語の特徴、時代の推移に伴う変化の様相を明らかにしている。朝鮮王朝の各時期における訳官たちの水準、朝鮮語における漢語語彙の表記のされ方、訳語に反映した日本語方言の状況なども詳しくわかり大変興味深い。語彙研究が中心となっているが、文法や音声についての言及も怠っていない。たとえば、『方言類釋』の日本語訳部分での「～マシタ」の乱用、そして日本語の濁音やハ行音をハングルで如何に表記するかなどに関する分析がなされている。ハングルによる日本語の表記は日本語音韻史研究の資料となるだけでなく、ひるがえって朝鮮語音韻史研究の資料ともなるので貴重である。重複や未整理のところは少し残るとはいえ、大変な労作であることは間違いのないところである。日本語学のみならず中国語学や朝鮮語学の面にも相当の貢献をなしているものと評価できるであろう。

#### 結論

以上の審査内容及び評価に基づき、本論文を審査対象とする、学位論文審査委員会は、全員一致して本論文は博士（日本語文化学）の学位を授与するにふさわしいものと判断し、ここに報告する。